

# 第九の大工!?! ベートーヴェンは天才か、職人か

日本フィルハーモニー交響楽団×マイケル・スペンサー  
音楽創造ワークショップ「オケのテイキは、おもしろい」<特別編>



開催日 2015年 11月 18日(水)東京芸術劇場 シンフォニースペース  
11月 23日(月祝)高千穂大学 タカチホホール (協力・高千穂大学)

文・オヤマダアツシ (音楽ライター)

## 聴き慣れた「第九」をマイクさん流に構造解析!?!する新鮮な時間

すでに多くの方が体験し、日本フィルの新しい活動として知られるようになった音楽創造ワークショップ。コミュニケーション・ディレクターであるマイケル・スペンサーさんが今回取り上げたのは、クラシック音楽の中でもっとも知られている作品のひとつであるベートーヴェンの交響曲第9番「合唱」、すなわち「第九」である。日本フィルも毎年12月には何度も演奏し、合唱で参加した(する)方も多いだろう。

しかし私たちは「第九」を、どのくらい知っているのだろうか、新しい聴き方を見つけてさらに楽しめないものだろうか。そうした疑問をあらためて自分に投げかけ、回答を探し出しながら作品に近づくことがこのワークショップにおける大きなテーマである。『第九の大工!?! ベートーヴェンは天才か、職人か』というタイトルからも、そうした期待を満足させてくれるような雰囲気が漂ってくるのだ。

今回のワークショップは、まず11月18日に東京芸術劇場で、日本フィルハーモニー協会合唱団のメンバー40名が参加して1回目を。そして11月23日に杉並区にある高千穂大学で、一般公募のお客様約40名が参加して2回目を行った。ワークショップの内容に大きな違いはないのだが、前者は合唱団員として「第九」に参加している方々であり、後者は客席から「第九」を楽しんでいらっしゃる方々。冒頭で参加者それぞれが「第九」の印象を紙に書いて壁に貼るという作業をした際、やはり「合唱」「歓喜の歌」といったキーワードが多かった前者に対し、後者の方たちは「年末」「ベートーヴェン」といったキーワードが多いという違いが見られ、なかなか面白い。中には「第九と忠臣蔵で年末が来たなと感じる」という方もおり、ベートーヴェンも自分の音楽が日本において冬の風物詩になるとは、想像もしなかつただろう。

また、初めて「第九」と出会ったときの印象をそれぞれが発表をするという作業では、「学校の行事で歌った」「ピアノの教則本に掲載されていたので弾いたことがある」という意見から、若い世代には「アニメの『エヴァンゲリオン』で知った」という方や、「歓喜の歌」がゴスペル・ソングとして歌われる映画『天使にラブ・ソングを』を挙げた方も。あらためて「第九」がさまざまところで使われ、親しまれていることがわかる。

しかし、挙げられたものはほとんどが第4楽章、しかも「歓喜の歌」についての印象ばかり。マイクさんの「皆さん、第1楽章から第3楽章までも『第九』なんですよ。忘れていませんか?」という声に、思わず笑い声があふれた。



## 「第九」の真髓を求めて舞台は東大寺へ!?

さて、そのマイクさんが「『第九』って、実はこういうものと似ているんですよ」とスライド写真付きでプレゼンテーションしたのは、なんと奈良・東大寺大仏殿への参拝。音楽とも西欧文化ともかけ離れたその内容に、ややざわめきの声も上がる。「日本では『第九』を聴きに行くということが、単に音楽を楽しむというだけではなく、厳かな気持ちで新しい年を迎えるといったような精神的な行為として捉えられている、と感ずることがあります」というマイクさんのインスピレーションにより生まれたアイデアだが、まったく違った視点の出現には驚かされ、その後の展開が気になってくる。

マイクさんは、有名な大仏への参拝をひとつのゴールとして考え、そのプロセスを勇壮な南大門からスタート。堂々たる門を見上げ、歩いて通り抜ける際に生まれた感情と「第九」の第1楽章をリンクさせて「ベートーヴェンが最初に用意した威容を感じてみましょう」と語る。続く第2楽章は、精巧な建築技法によって建てられた塔を眺め、参拝への気分を少しずつ高める時間。第3楽章はいよいよ大仏殿の前に、常香炉で煙を浴び、身を浄めるという静かな行為。そしていよいよ「歓喜の瞬間」を求めて大仏殿へ足を踏み入れ、精神的な満足感を得るという時間がやって来るのだ。

さらにマイクさんは「ここにも注目してください」と、大仏殿の建築技法をクローズアップする。こうした寺社仏閣には宮大工というハイレベルな技術を持つ職人が携わり、釘などを使わずに木材同士を接合する高度な伝統構法を駆使しているのだが、小さな素材を組み合わせて存在感のある芸術作品を創造してしまうのは、「ダダダダン」という素材をあれこれとやりくりして交響曲第5番「運命」を生み出してしまったベートーヴェンの創作プロセスそのもの。もちろんその創作思考回路は交響曲第9番、すなわち「第九」にも受け継がれており、たとえば各楽章の冒頭で演奏される主題またはモチーフが、五度もしくは四度の音程という素材によって作られているという“楽譜上のからくり”を指摘する。ここにきてワークショップのタイトルである『第九の大工』に光が当てられたのだ。

楽譜についての知識がなく、コンサートで配布される曲目解説を読んでも専門用語がわからないという方もいらっしゃるだろう。しかし、こうして目に見える建築にたとえてみると、作曲家であるベートーヴェンは卓越した職人でもあったことが、おぼろげながらもわかってくるはずだ。その「あ、そういうことか!」という発見こそが、マイクさん流ワークショップの真髓なのである。

## 「第九」の社会的・政治的な背景を探り、作品や言葉の重さを知る

今回のワークショップでプレゼンテーションされた「第九」の側面は、この他にもいろいろ。作曲された時代（19世紀前半）の社会的な背景を考えるなら、フランス革命やナポレオン戦争などを通じて社会構造が変化したことや（貴族社会から市民社会へ）、時代の流れに敏感だったベートーヴェンが政治的なメッセージを自作に込める必要性を感じたのではないか、ということも語られた。そうした中で出会ったシラーの『歓喜に寄せて』が、ナショナリズムと音楽との関係が深まる時代に「第九」という形へと結実したことや、同じ詩を使ってシューベルトが歌曲を作っていたことなどを紹介。20世紀においては、自由や希望を歌い上げていた「歓喜の歌」が、人種差別のあったアフリカの南ローデシア（現ジンバブエ）で国歌に採用されていたことや、スタンリー・キューブリック監督の映画『時計じかけのオレンジ』では暴力のシンボルとして使われていることなどを取り上げ、ベートーヴェンやシラーの思惑とはまったく違ったところで使用されているケースがある、という話も聞かせてくれた。

また『歓喜の歌』で叫ばれる「フロイデ（歓喜、英語では「JOY」）」が、単なる感情表現としての喜びではなく「芸術を探究して人生の満足度を高めようというメッセージかもしれない」というマイクさんからの意見も、歌詞の奥深さに気がつくための大きなヒントだ。特に合唱団へ参加している方々は、自分が歌う言葉のひとつひとつを再吟味するきっかけにもなっただろう。客席で演奏を聴く方々も、手元の歌詞・訳詞を目で追うだけではなく、ベートーヴェンがどのような感情でこうしたメッセージを聴き手に伝えてくるのかについて考えさせられたはずだ。

これまでマイクさんのワークショップは、参加者たちが歌い、踊り、または用意された楽器を使って新しい世界を想像するという内容が多かった。今回はそうしたことをまったくせず、コンサートに向けての予習レクチャーといった内容であり、これもまた作曲家や作品を理解するための近道だと言える。さまざまな方法、スタイルで行われるワークショップだが、2016年も違った作品で行われる予定であるため、関心がある方はぜひご自身で体験されてみることをおすすめしたい。

